



書評

小説に昇華した「移動する子ども」という記憶

温又柔 (2016). 『来福の家』 白水社 (Uブックス).

川上 郁雄*

© 2017. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. はじめに

温又柔 (おん ゆうじゅう) 著『来福の家』(白水社, Uブックス) は, 2011年に集英社から刊行された同名の書籍を, 2016年に白水社が新書版として復刊したものである。同じ年に, エッセイ集『台湾生まれ 日本語育ち』(2016年, 白水社)も同社から刊行されている。後者について, 評者はその書評(川上, 2016)で「この本が「移動する子ども」学の貴重な研究書である」と述べた。それに比べ, 本書『来福の家』は, 小説である。

『来福の家』には2作品が収録されている。その一つが「^{こうきょこうらいか}好去好来歌」。この作品は温さんの文学界デビュー作品で2009年の第33回すばる文学賞佳作を受賞した作品だ。本書に収録されているもう一つ小説が「来福の家」である。この小説のタイトルが本書の書名にもなっているように, この作品も, 温さんにとって重要な作品といえよう。実際, 「あとがき」で「本書に収められた二つの小説は, 私の原点であり源泉です。」と温さんは明言している。

私は文学評論家ではないので, この作品の文学的価値を論じることはできない。ここで私が論じたいのは, むしろ, エッセイ集『台湾生まれ 日本語育ち』と同様に, 本書のもつ, 「移動する子ども」学の研究から見た学術的意味である。以下, 二つの作品で描かれている登場人物の心情や出来事を, 幼少期より複数言語環境で成長する子どもの視点から見てみよう。その上で, 最後に, 「移動する子ども」学の観点から考察を述べる。なお, 以下のかっこつきの引用はすべて本書からである。掲載ページ数は省略する。

* 早稲田大学大学院日本語教育研究科 (Eメール: kawakami@waseda.jp)

2. 「好去好来歌」

この作品は、「中華民國」のパスポートを持つ台湾人の両親から生まれた縁珠^{えんじゆ}という名の18歳の女子学生を主人公とする。縁珠は台湾で生まれ、幼少期に東京へ移住した設定になっている。

物語は、縁珠と縁珠の母、縁珠の彼氏の麦生^{むぎお}を中心に展開するが、物語の場面やエピソードには、幼少期に複数言語環境で成長した著者の経験が随所に反映しているように見える。たとえば、縁珠が両親と行った東京の入国管理局の様子、縁珠が高校生の時に大学で開かれた中国語の授業に参加した時の風景、縁珠が中学生の時に英語の授業で名前の英語表記がパスポートの英語表記と異なることに気づいたシーン、幼少期に海外で過ごしたクラスメイトからパスポートを見せてもらった時に縁珠が動悸を覚えたシーン、中国語を学ぶ麦生が縁珠の家で餃子を食べるシーン、縁珠の母が縁珠の結婚について述べるシーンなど、どれもが日本語、中国語、台湾語、またその発音や文字、日本人、中国人、台湾人などの既成の枠組みに揺れる、主人公の縁珠の心情がリアリティをもって表現されている。日本語と中国語と台湾語がひしめき合う母の言葉の奥底にある思いに気づき、縁珠がいう「わたしと大事な話がしたいのなら、ちゃんと日本語で話してよ。」と言う台詞や、麦生が習いたての中国語で縁珠の母に話しかける時に、縁珠が「日本人のくせに、どうして中国語を喋るの？」（下線部は、本書では傍点）と言い放つ台詞、麦生の本名について「（タナカダイスケ！）なんという平凡な日本語なのだろう、と思った。」（下線部は、本書では傍点）という縁珠の言葉などは、その例であろう。

さらに、この物語に台湾に住む曾祖父母、祖父母や台湾の風習が家族の歴史を語るように綴られている。日本の植民地時代を経験した祖父母の日本語や、縁珠が小学生の頃だんだん日本語しか話さなくなった時「さあ、今から「中国語」を話そうか？」と中国語を維持しようとした縁珠の父の言葉など、ことばに関連する描写も多い。

著者の温さんは、『台湾生まれ 日本語育ち』（温，2016）で次のように述べている。「わたしは小説を書いていたというよりは、自分が経験したことを、自分ではないだれかに生き直してもらうために、小説という形式を借りていた気もする。」

つまり、温さんは自分の経験と向き合いながら、小説を紡ぎ出しているということである。そうであれば、この作品にも、温さんの経験が色濃く映し出されていると解釈できよう。

3. 「来福の家」

この作品は、台湾人の両親のもと日本で生まれた許笑笑^{キョウショウショウ}という22歳の女性が主人公である。大学を卒業してから、中国語専門学校に入るところから物語が始まる。この物語も、随所に、著者の経験をもとにしたと思われるエピソードが挿入されている。

たとえば、主人公が幼稚園の頃、砂場で日本人の友だちに「実は、あたしにはもうひとつの名

前があるのよ」と中国語名を打ち明ける。その頃、笑笑は家族から「えむ」から「エミ」と呼ばれていた。ただ、このエピソードに、中国語名のカタカナ表記音について「シュイ・シャオシャオ、あるいはスウイ・シアオシアオ」がよいのだろうかと思いを書く。また、笑笑の6歳上の姉、^{カンカン}歡歡は大学で中国語学科を卒業して、日本語教師養成学校に通っているが、その姉の名前についても、「シュイ・ファンファン、それともスウイ・ファンファン」という表記の話が絡む。

また、中国語のできる姉が日本語教師として、中国から来日して間もない莉莉ちゃんという小学校5年生の女の子に日本語を教えにいくエピソードもある。「許先生が来ると、莉莉の表情が明るくなるんです。」「莉莉は、ふだん、ことばがわからない中、必死にがんばっているんです。だから許先生も、日本語を教える、というよりは、中国語でたくさん莉莉の話聞いてあげてください。それが、莉莉にとって次もがんばろうって力になるんですから……。」と担任の声を載せている。ここにも、「移動せざるをえなかった」子どもの心情とそれを支える大人のやりとりが示されている。

他には、入学に必要な書類として住民票を取るのか外国人登録証明書が必要なのか、中国の中国語と台湾の中国語の発音や漢字の違い、中国や台湾では婚姻による改姓は義務付けられていないことと日本では婚姻によって片方の姓に改める義務があることなどがエピソードとして挿入され、物語は展開していく。

これらのエピソードも、『台湾生まれ 日本語育ち』（温, 2016）を合わせて読むと、温さんの経験と結びついていることが窺われる。

4. 考察

この二つの作品の文学的な価値やストーリー性をここで論じることはしない。むしろ、評者が注目するのは、温さんが作品の中で構築する、「自分が経験したことを、自分ではないだれかに生き直してもらおう」意味世界である。その世界というのは、温さんが『台湾生まれ 日本語育ち』（温, 2016）で、「文学が証明しようのない複数の真実に光を照らすものである限り、わたしもまた文学なしではいられない。」と述べるように、「証明しようのない複数の真実」の世界なのである。なぜ「証明しようもない」のかと言え、この「世界」は、これまでアカデミズムにおいても議論されてこなかった世界だからである。

その世界は、「好去好来歌」の縁珠が自分の日本語、台湾語、中国語について、また日本人、台湾人、中国人について思う意識の世界であり、「来福の家」の笑笑が「わたしにとっての中国語は文字のないことばだった。響きそのもの、といってもよかった。」と語り、姉の歡歡が、「日本語は、歡歡にとっては母国語のようなものですから」と語る感情の世界である。その世界は、「チョコレートとチョコレート」「牛乳と牛乳」というように、日本語と中国語の音から「どちらが美味しそうと思うか」という感覚的な世界でもある。そして、「来福の家」の最後に、「わたしたちか

らみたら、自分はたまたま台湾人であるというだけで、それは、日本人が偶然日本人であるのと変わらないなのだ」と述べ、同時に、「かんかん、も、しょうしょう、も、すごく素敵な響きなんだもの。そういった姉の瞳がしっとり潤んでいた。そうね、わたしはいう。ほんとうにそうよ、おねえちゃん、かんかん、も、しょうしょう、も最高の名前よ。」と述べる、この感情の奥底、情念とも呼べる世界なのである。

温さんは、この二つの作品について「あとがき」で次のように述べている。

「言葉を知らなかった頃の記憶を出発点に、小説を書いてみたい。赤ん坊だった自分の周囲にあふれる音のざわめき、大人たちが交わしあう声のリズムと抑揚。言語を言語と認識する以前の、ありとあらゆる言語が私の「母国語」となり得る可能性を持っていた幸福な無文字時代の記憶を書くところから、小説を始めたい・・・」

幼少期から複数言語環境で成長する子どもたちにとって、ことばをめぐる自らの経験と記憶から生まれる「感情」「感覚」「情念」の世界でどのように生きていくか。それが、小説の主題となることを、温さんはこれらの作品で示したといえよう。同時に、評者が思うのは、「移動する子ども」という記憶（川上編，2013）による世界は、本書の描く「感情」「感覚」「情念」の世界であり、その中で「移動する子ども」という記憶と自らの生にどう向き合っていくのかという課題は、アカデミズムの重要な研究テーマであるという点である。

幼少期より複数言語環境で成長する子どもにとって重要な課題は、語彙や作文力の量的調査ではわからない世界にあるということである。バイリンガルの子どものをいかに作るかということだけを目標にするような研究は、本書の縁珠や笑笑、歡歡の前ではなんら意味をなさない。本書は、まさに、21世紀に必要な「移動する子ども」学の研究テーマを明示した「研究成果」として高く評価できる作品である。

参考文献

温又柔 (2016). 『台湾生まれ 日本語育ち』白水社.

川上郁雄 (2016). 書評 我住在日語：わたしは日本語に住んでいます。——温又柔 (2016).

『台湾生まれ 日本語育ち』白水社. 『ジャーナル「移動する子どもたち——ことばの教育を創発する」』7, 59-69.

川上郁雄 (編) (2013). 『「移動する子ども」という記憶と力——ことばとアイデンティティ』くろしお出版.